

(別紙1)

論文の内容の要旨

氏名	遊馬幸子		
論文題目	(外国語の場合は、日本語で訳文を( )を付して記入すること。) 内モンゴル・フルンボイル草原地域における多民族の固定式住居に関する研究 ーバルガモンゴル族・エヴェンキ族・ダウール族を対象としてー		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長		
	委員		
	委員		
	委員		
	委員		
	委員		
内容の要旨			
<p>本論文は、中国内モンゴル自治区フルンボイル市で牧畜を営むバルガモンゴル族、エヴェンキ族、ダウール族の固定式住居を対象としたものである。フルンボイル市には比較的近接した地域に上記3民族が暮らし、牧畜を営んでいる。しかし、各々の住居には共通点と相違点が存在している。</p> <p>モンゴル族の伝統的住居であるゲル(移動式住居)については多くの研究が存在している。それに対して固定式住居については以下を除きあまり研究がされていない。海日汗はゲルの空間的特徴が固定式住居にどのように引き継がれているかについて研究し、アルンジョル、野村理恵、イジョウは、各々アラシャ盟、シリソグ盟、ヒンガン盟の固定式住居について、主としてどのような平面タイプが存在するか、平面タイプが歴史的にみてどのように発展してきたかについて研究している。それに対して、本論文が対象とした内モンゴル自治区の北部にあるフルンボイル市の固定式住居を対象とした研究は見られない。バルガモンゴル族、エヴェンキ族、ダウール族については、歴史、言語、文化等に関する研究は行われているが、住居については伝統的な住居を除きほとんど研究されていない。</p> <p>そのような状況を踏まえ、本研究は近接した地域で牧畜を営んでいるバルガモンゴル族、エヴェンキ族、ダウール族を対象に以下の4点を検討している。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>①、三民族の放牧方法及び放牧地利用を明らかにする。</li><li>②、三民族の固定式住居の平面タイプ及び部屋の呼称・用途、暖房器具の種類と変遷を明らかにする。</li><li>③、①及び②の項目について共通する点を明らかにする。</li><li>④、①及び②の項目について相違点を明らかにし、なぜ相違点が生じているかを検討する。</li></ol> <p>本論文は、第1章「研究の背景と目的」、第2章「フルンボイル草原地域における多民族の概況」、第3章「新バルガ右旗におけるバルガモンゴル族牧畜民の住居と生活様態」、第4章「エヴェンキ族自治旗におけるエヴェンキ族牧畜民の住居と生活様態」、第5章「エヴェンキ</p>			

族自治旗におけるダウール族牧畜民の住居と生活様態」、第6章「フルンボイル草原地域における多民族牧畜民の住居」、第7章「結論」の7章で構成されている。

各章の概要は以下の通りである。

第1章「研究の背景と目的」では、研究の背景、研究の目的、既往研究の検討、研究の方法、調査概要を述べている。

第2章「フルンボイル草原地域における多民族の概況」では、フルンボイル市で牧畜を営む3民族の歴史、文化、主な居住地などを概観している。

第3章「新バルガ右旗におけるバルガモンゴル族牧畜民の住居と生活様態」では、フルンボイル市新バルガ右旗アラタンエメル鎮の19世帯を対象に現地調査を行っている。調査は2013年6月に実施している。まず、家族構成、生業、敷地面積などに関する基本情報をまとめている。そして、季節によってどのような放牧方法をとっているか、放牧はどのような敷地で行っているか、放牧との関係でどのような住居を利用しているかを明らかにしている。さらに、バルガモンゴル族の固定式住居を廊下型、非廊下型の二つに大別し、前者をさらに南北廊下型、東西廊下型、後者を2行型、1行型に分け、合計4タイプで説明し、各々がどの年代に多く建てられたかをまとめている。部屋の呼称については、モンゴル語、中国語がどのように使われているか、方角、大きさ、用途など呼称がどのように決められているか、各部屋がどのような用途に使われているかを明らかにしている。暖房器具については固定式のフーチャン（壁暖房）、ハンジ（オンドル）、ノアンチ（温水暖房）、ジョーフ（ストーブ）、移動式のデンノアンチ（ラジエータ）、ジョーフ（ストーブ）に分類し、各々が設置された年代及び住宅平面との関係を整理している。

第4章「エヴェンキ族自治旗におけるエヴェンキ族牧畜民の住居と生活様態」では、フルンボイル市エヴェンキ自治旗輝ソムで牧畜業を営む20世帯を対象に現地調査を行っている。調査は2014年9月に実施している。第3章と同じように、基本情報をまとめたうえで、放牧方法、放牧地利用を明らかにしている。そして、エヴェンキ族の固定式住居を2行2列の基本型（A）、基本型を北側へ増築した型（B）、さらに最初から（B）型平面で建築した（B'）型、（B）型、（B'）型をさらに増築した（C）型、1行の基本型（D）の5タイプで説明し、各々がどの年代に多く建てられたかをまとめている。また、第3章と同様に部屋の呼称、用途を調べている。暖房器具については第3章の分類に従って、各々が設置された年代及び住宅平面との関係を整理している。

第5章「エヴェンキ族自治旗におけるダウール族牧畜民の住居と生活様態」では、フルンボイル市エヴェンキ自治旗バヤンタラダウール族民族郷の19世帯を対象に現地調査を行っている。調査は2014年9月に実施している。第3章と同じように、基本情報をまとめたうえで、放牧方法、放牧地利用を明らかにしている。そして、ダウール族の固定式住居を2行2列で北方向に入り口がある基本型（A）、1行型である基本型（B）、2行2列で入口が東もしくは西向きに設置された基本型（C）に分け、さらに（A）型を北側に増築した（A-1）型、最初から（A-1）型平面で建築した（A-2）型、同じように（C-1）型、（C-2）型、（B）型を増築した（B-1）型の8タイプで説明し、各々がどの年代に多く建てられたかをまとめている。また、第3章と同様に部屋の呼称、用途を調べ、暖房器具についても第3章の分類に従って、各々が設置された年代及び住宅平面との関係を整理している。

第6章「フルンボイル草原地域における多民族牧畜民の住居」では、第3章～第5章の調査結果を基に、三民族の放牧方法、放牧地利用、固定式住居のタイプ、建設時期、部屋の呼称、部屋の用途、暖房器具の使用状況、暖房器具の設置時期をまとめ、共通点、相違点を考察している。

7章「結論」では、各章の要約、第6章で見た相違点が3民族の歴史的違いからなぜ生じたと考えられるのか、今後の研究課題をまとめている。

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名	遊馬幸子		
論文題目	(外国語の場合は、日本語で訳文を( )を付して記入すること。) 内モンゴル・フルンボイル草原地域における多民族の固定式住居に関する研究 ーバルガモンゴル族・エヴェンキ族・ダウール族を対象としてー		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長		
	委員		
	委員		
	委員		
	委員		
	委員		
要旨			
<p>本研究は、中国内モンゴル自治区フルンボイル市で牧畜を営むバルガモンゴル族、エヴェンキ族、ダウール族の主として固定式住居を対象としたものであり、①三民族の放牧方法及び放牧地利用、②三民族の固定式住居の平面タイプ及び部屋の呼称・用途、暖房器具の種類と変遷、③前述の項目についての共通点、④前述の項目についての相違点を明らかにした研究であり、社会的意義、学術的意義が大きい。本研究の意義は以下の2点にまとめられる。</p> <p>一点目は、三民族の固定式住居の平面に関する特徴を型として明らかにしたことである。三民族は比較的近接した地域で暮らし、牧畜を生業としている。しかしその固定式住居には明らかな違いがみられ、現地調査を通じてその違いを明らかにしている。バルガモンゴル族の固定式住居は廊下型、非廊下型の二つに大別でき、前者はさらに南北廊下型（現地調査で確認できたのは4棟、以下表記を略す）、東西廊下型（4棟）、後者は2行型（7棟）、1行型（3棟）に分けることができ、合計4タイプで説明できる。エヴェンキ族の固定式住居は2行2列の基本型（A）（5棟）、基本型を北側へ増築した型（B）（4棟）、さらに最初から（B）型平面で建築した（B'）型（6棟）、（B）型、（B'）型をさらに増築した（C）型（4棟）、1行の基本型（D）（1棟）の5タイプで説明できる。ダウール族の固定式住居は2行2列で北向きに入り口がある基本型（A）（現存せず）、1行型である基本型（B）（2棟）、2行2列で入口が東もしくは西向きにある基本型（C）（現存せず）に分けることができ、さらに（A）型を北側に増築した（A-1）型（2棟）、最初から（A-1）型平面で建築した（A-2）型（11棟）、同じように（C-1）型（2棟）、（C-2）型（1棟）、（B）型を増築した（B-1）型（1棟）の8タイプで説明できる。</p> <p>二点目は、固定式住居の建設時期、固定式住居の平面型、部屋の呼称、用途、暖房器具の種類に関する相違点がなぜ生じたかを三民族の歴史性、放牧方法の違い等から検討した点である。本論文で検討した主な相違点と相違が生じた理由は以下の7点にまとめられる。</p> <p>①三民族で見られた放牧方法は、季節放牧、日帰り放牧、畜舎飼育、自由放牧、委託放牧の5</p>			

つであった。そのうちダゴール族は季節放牧を行っていなかった。ダゴール族はもともと遊牧をしていなかったため、季節放牧を行っていないと考えられる。バルガモンゴル族とエヴェンキ族はもともと遊牧を行っていたが、禁牧政策以降、遊牧が季節放牧に変化したと考えられる。

②固定式住居の建設時期を見ると、ダウール族は早い時期から固定住居を使っていたが、それは昔から狩猟、農業、漁業を生業としていたためだと考えられる。それに対して、バルガモンゴル族とエヴェンキ族は比較的遅くまで遊牧をしていたため、それに適した移動式住居ゲルを遅くまで利用しており、固定式住居を建て始めたのは、第一次土地分配政策以降（1980年代）である。また、バルガモンゴル族、エヴェンキ族は今も季節放牧をしており、季節放牧の際はゲルを利用している世帯が多い。

③増築を見ると、ダウール族とエヴェンキ族の固定式住居は北側へ増築がみられ、バルガモンゴル族は東側もしくは西側への増築が多かった。前者は倉庫や畜舎を母屋の東側もしくは西側に建てることが多い。そのため、北側にスペースが生じ、北側への増築が最適だったと考える。バルガモンゴル族が集住している地域では、冬に北から吹く風が強いいため、防寒を兼ねて畜舎、餌置き場などを母屋の北側に配置している。そのため、東側もしくは西側への増築が最適だったと推測される。

④入口の位置を見ると、バルガモンゴル族の固定式住居では入口はほぼ南向きに設置されている。それに対して、エヴェンキ族、ダウール族では北向き、東向き、西向きにも設置されている。モンゴル族の移動式住居ゲルの入り口は、南向きもしくは東南向きに限定されており、その考え方が固定式住居にも引き継がれたと考えられる。モンゴル族の移動式住居ゲルの入り口が南向きもしくは南東向きであり、モンゴル族の固定式住居にもそれが引き継がれているという指摘は、他地域で調査研究を行った先行研究で明らかにされており、フルンボイル市でもそれが確認できた。

⑤居室の呼称は三民族とも、モンゴル語と中国語の両方を使っている。しかし、ダウール族はバルガモンゴル族、エヴェンキ族と比べ中国語の呼称が多い。それは、ダウール族が内モンゴルに移住する前、農業や林業が生業であったため、漢族の影響を多く受けたからではないかと考えられる。

⑥三民族とも部屋数が増えると部屋の用途が、寝室、台所、食堂などに機能分化している。しかし、バルガモンゴル族とエヴェンキ族の固定式住居では、部屋数が比較的多くなっても、一つの部屋を、寝室、台所、食堂、接客で利用していた。これは一室住居であるゲルの空間利用が固定式住居にも引き継がれていたからだと思われる。

⑦暖房器具を見ると、ダウール族の固定式住居にはハンジが多く設置され、バルガモンゴル族とエヴェンキ族の固定式住居にはフーチャンの設置が多い。ダウール族は内モンゴルに移住し牧畜を始める前は、中国東北地方で狩猟、農業、漁業を生業としており、その時に使っていた伝統住居の暖房器具は、ハンジが中心であった。そのため、内モンゴルに移住した後もハンジを使い続けているのだと思われる。

本論文に関して審査論文として、日本家政学会誌に 2 編（日本家政学会誌 vol.70 No.6 pp346-360、2019年2月。日本家政学会誌 vol.73 No.12、2022年12月）、奈良女子大学家政学会家政学研究に 1 編（家政学研究、Vol.64, No.1、2017年10月）掲載されており、生活環境計画学講座が定める内規を満たしている。

よって、本学位申請論文は、奈良女子大学博士（生活環境学）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。